

▶▶ 特別付録 2 数学教育と私

—小学生時代の恩師藤田至先生の思い出（長野県での講演から）

1. 「教育県＝長野」——子供が感じた信濃教育主義

私は長野県生まれの長野県育ちです。いまは立派なビルディングが建っている昭和通りと中央通りの交差点横の家で生まれました。当時は昭和通りも中央通りも馬車が往来する時代で、そこでのんびりと保育園時代を過ごしました。小学校に入るときに、信州大学の附属小学校のグラウンド裏に引っ越しました。そこで小学校5年生まで過ごしましたので、私にとって長野はふるさとであります。私が長野に強い思いを持っているのは、長野の厳しい自然が大好きだということ以上に、私にとって長野が、心のふるさと、自分の人格の原点として、私の中に今日でも生きているからです。

その最大の理由は、私とその小学校で私の生涯の師とも言うべき先生に出会ったことです。

もう十分昔の話になっていますので、お名前を言ってもいいと思いますが、藤田至先生とおっしゃいます。藤田宏先生は大学時代の恩師ですが、藤田至先生は小学校のときの担任の先生です。

藤田至先生は、信州大学の教育学部に学んで、おそらく新任の1年目に私のクラスの担任になったのではないかと思います。本当に映画に出てくるような立派な先生でした。子供たちを、朝から晩まで、月曜日から日曜日まで休みなくかわいがってくださいました。先生には休みありませんでした。ほとんど毎日曜日、先生お手製のカレーライスをごちそうになるために私たちは先生の家に行っていました。私たちが校庭で遅くまで遊んでいるときも、先生は翌日のプリントなどを用意なさりながらずっと学校に残ってくれました。藤田至先生は、勉強ができる、できないに無関係に、すべての子供を本当にかわいがってくださいました。どんな子供も、自

分がいちばん藤田先生に愛されていると確信していました。私もこの年齢になって初めてわかりますが、附属小学校ですから、「教育熱心」など両親がたくさんいらしたはずで、PTA などでは、藤田先生に対して、しっかり勉強を教えてくださいという要望が随分出されていたということ、母を通して聞きました。そのとき藤田先生は、PTA でお母さんたちから出てくる宿題の要求などに対して、毎回「勉強のことは心配しないで全部、私に任せてください。お母さんたちは、お子さんの健康のことを考えてください。勉強は私が責任を持ってみます」と言っていたそうです。そうやって、お母さんたちの勉強への「要望」をびしゃっと断っていた、ということです。

ですから、私は、藤田先生に担任を持っていた小学校4年まで、毎日の宿題というものを知らずに過ごしました。これは厳然とした事実だから、恥を忍んでも言わなければならないのですが、私はひどい劣等生でした。しかし、自分が劣等生であるということを全く意識することなく育ててもらいました。というのは、藤田先生は通信簿も出さなかったのです。通信簿を小学校の子供に対して出さないという教育実践は、そのころの長野ではほかに例があったのかもしれませんが。長野県には、文化を大切にする風土が確かにありましたから。しかし、藤田先生の、並大抵でない理想主義は、PTA の関係者やそれを取り巻くさまざまなところで摩擦を引き起こしていたようです。

藤田先生がひょっとするとお辞めになってしまうのではないかとこの噂も、私たち子供の耳にも伝わってきました。私たちが不安を募らせていると、先生は、そんなことはない、いつまでも皆と一緒にだと言って慰めてくださいました。しかし、私が小学校4年生の3学期の終業式のときに、先生は演壇に立っていらして、校長先生から、藤田先生が転勤にな

るというお話がありました。そのときの私たちの動揺、狼狽はいまでも鮮明に覚えています。藤田先生がPTAの圧力や社会の圧力で、とうとうクビを切られるという事件が起ってしまったわけです。

私がいま長野で教育を巡るお話をさせていただく機会を得て、藤田先生を育んだ信州大学教育学部の風土と藤田先生を追放していった信濃教育主義の体制を、40年近い歳月を隔てて、もう一度問い直す機会にすることができればと思っている次第です。

2. 「必要悪」に染まった名門小学校の「教育」

先ほど、私が劣等生であったと述べましたが、劣等生であることさえ意識しなかった私が、なぜこれに気づいたのか、事情を簡単に説明いたしますと、私は小学校6年生の初めに横浜に転校しました。横浜の妙蓮寺というベッドタウンです。サラリーマンがたくさん住んでいる街は、概して進学に関して上昇指向が強いもので、そういうところには、進学に熱心な家庭の声援に応えることが何よりも大切だと思っている先生、いわゆる進学指導に熱心な先生がたくさんいらっしゃいます。そうした先生方をたくさん抱えていることを、誇りに思っている校長先生がまたいらっしゃるわけです。

私はたまたま、そうした学校の1つに転校してしまいました。その学校では、小学校の5年生までに、小学校のすべてのカリキュラムをこなしているだけではなくて、中学入試に必要なことがらについても、小学校の5年生までにすべて完了させておきまして、6年生の1年間は中学受験に対するドリルに当てる体制になっていました。そのクラスに突然、転校生として入りましたが、まだ類っぺたの赤い長野の田舎の少年です。「信州の山猿」と友だちにさんざんからかわれましたが、それ以上に勉強がまったくわからないのがショックでした。

みんなが「タイカノカイシンはムシゴ」な

どと言っているのですが、肝心の大化改新とは何のことかさっぱりわからないわけです。小野妹子も、へんな名前だと思うぐらいです。社会科だけでなく、理科もわからない。オームの法則も知らないのに抵抗を並列につないだ場合、直列につないだ場合と、みんながやっている計算に、圧倒されておりました。理科や社会科に関することは、知識の問題ですから仕方ないかもしれませんが、算数に関しても、ちんぷんかんぷんでした。

長野時代、勉強は決して嫌いではありませんでした。そのころは社会科が一番好きでした。いまでもその傾向がありますが、子供のころに社会科が好きだったのは、藤田至先生が社会科がご専門だったからでしょう。藤田先生が黒板にお書きになる日本の地図は、地図帳に載っている日本地図よりもカッコいいと思っていました。それほど尊敬していました。算数に関しては、特に、好き嫌いの感情はありませんでしたが、不得意という意識もありませんでした。

しかし、長野から転校して行って、算数がまったくわからないという経験をしたわけですね。というのは、鶴亀算とか流水算とか旅人算とか、後はもう忘れてしまいました。問題文を読んだ途端に「これは××算」とぼつと言う子供たちに突然囲まれてしまったわけです。あるいは図形の面積に関しても、「底辺かける高さ割る2」、「上底足す下底かける高さ割る2」などと、みんなスラスラ言うわけです。私は台形という概念すら知りませんでした。お坊さんが「ぎゃーてい、ぎゃーてい、はらそうぎゃーてい、…」とお経を上げるのを聞いていた私は、みんなの言葉が「お経みたいでかっこいい」と思っただけで、中身はわかりませんでした。

3. 私の「受験勉強」=藤田先生からもらった資産

担任の先生は、「とんでもない子供が入ってきてしまった」ということだったと思います。私と、そのクラスで一番よくできる友人

の2人は、給食や掃除の当番を免除されて、その代わり、みんなが当番をやっている間、私が友人から算数の勉強を教わることになりました。5年生までにやったプリントやノートを使って、友人が私に教えてくれたわけです。

習ったことの中でいまでも覚えているのは分数の計算法です。分数は知っていましたが、その計算の方法はまったく知らなかったのです。友人は、分数を掛け算するには分子同士、分母同士を掛けて、それで分数を作ればいと教えてくれました。それを聞いたとき、私はすごく感動しました。「そうか、それはそうだ、いかにもそうだ」と思ったのです。その次に友人は、分数の割り算は掛ける方の上下を逆にして、掛けるんだと教えてくれました。私は、掛け算のときそうだったのだから、割り算のときは反対にするのは当たり前だね、と答えました。しかし、どうして当たり前だと思ったのかは全然覚えていません。いまの数学で言うところの、 $(x^{-1})^{-1}=x$ 、つまり逆元の逆元が元に戻るといふようなことがわかっていたとは、到底思えないわけです。

確実なのは、分数と演算についての基礎的な考え方を藤田先生によって、本当に深く教えられていたということです。掛け算とはどのようなものであるか、掛け算と割り算がどういう関係にあるか、ということ、子供なりに深く納得していた、ということです。そのような基礎があれば、分数の掛け算を習えば、直ちに割り算についてもわかったと思えたのでしょう。

技術的な知識は、基礎さえできていれば本当に修得はたやすいものだということ、自分自身の経験を通してつくづく思います。転校して行った当初はクラスの落ちこぼれでしたが、1学期が終わるときは、友だちに追いついて、流水算や旅人算もこなせるようになりました。時計算や食塩水の問題なども、線分を使って解くことができるようになっていきました。いま考えてみると、線分を使って算数の問題を解くということは、中学の1次

方程式の議論と平行でありますから、1つわかれば全部わかるのは当然なのですが。

進学指導に定評のある担任の先生は、私がさぞかし長野の田舎では秀才でならしていたのだろうと思われたそうですが、やがて届いた長野での成績を見て先生はえらくびっくりしたということです。そのときの先生の話そのまま引用すると、「親にも見せられない成績」ということでした。藤田先生は私のことをあんなにかわいがってくださったのに、職務にはたいへん忠実でいらして、私の成績についてはウソを書けなかったのだと思います。(笑)

このように、私は長野では自覚のない劣等生でしたが、横浜で勉強から脱落していることに気づいたとき、少なくとも算数に関してはすぐにトップクラスになることができました。これは、数学教育のとても魅力的で、不思議な部分だと思えます。物事がわかるとはどのようなことなのか、概念を理解するとはどのようなことなのか、こういうことを藤田先生が徹底して教えてくださっていた蓄積が表に出ただけのことです。実際、私は、横浜の友だちが、台形の面積公式や三角形の面積公式をわざわざ別々に覚えたりしているのを馬鹿馬鹿しいと思いました。長方形の面積さえわかれば、三角形を長方形に帰着させることは簡単にできるし、台形においては、対角線を1本引くだけで三角形に帰着できる、と考えていたのでしょう。

これはもちろん私の思い上がりであって、台形の面積の公式には、さらにもう少し深い意味があるわけです。たとえば、等差数列の和はまさに台形公式です。

しかし、私がそのように小学校のころ多くの公式をただ並列的に覚えていく友人たちに対して、そうしたことをする必要はないと子供ながらに思うことができたことは、正しい数学教育のもつ力以外の何物でもありません。

正しい数学教育こそが、本当にたくましい子供たちを育てることができるのだと思うのです。〔以下略〕